なんだこの適当な小説

夢光

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
なんだこの適当な小説

【Ｎコード】
Ｎ６７９２Ｑ

【作者名】
夢光

【あらすじ】
初書き。
小説になっていないところ、話がメチャクチャだったりするかもですが、
スルーしていただけると幸いです。

1話　転校生（前書き）

初書きです。
とりあえず話の内容がハチャメチャだったりしますが、
とりあえず頑張ってお楽しみください。

1話　転校生

「今日はここまでー」
３時限目終了のチャイムが鳴った。
授業に聞き飽きた生徒たちがため息を突きながらバラけていく。
とは言っても、授業などまるで聞いていない奴らだが。
「まだ３時限目かよ…」
などグチを叩いていた、俺の名前は「路弘（みちひろ）」。
極普通のどこにでもいる高校生である。
何故遊んでる時の５０分と授業の５０分はこうも違うんだろう、と考えながら、
隣の生徒の言葉が不意に耳に入ってきた。
「知ってるか？明日、転校生来るらしいぜ！」
転校生？この時期にか？今は８月中旬、この時期に来てどうするんだ。
こんな腐った学校に来ても得るものはないってのに。
よく理解出来ないまま、そのまま４時限目に縺れ込み、転校生の話もいつしか忘れていた。

―翌日。
自分は転校生が来るなど、朝の時点ではまるで頭になかった。
俺は、朝の教室のザワつきから転校生の話を思い出した。
「男か？」「女か？」「女がいいな～」
などと、定番の言葉が生徒の口からこぼれていた。
「静かにー」
覇気のないダルそうな教師の声から、転校生が来ると告げられた。
そんなことは誰もが知っている。
「入ってこい」と教師、生徒がはち切れんばかり心を踊らせている。
男だった。

「柳（やなぎ）　巧（たくみ）。ヨロシク」
生徒の一部はテンションガタ落ち、生徒の一部は既にスイッチが切れていた。
どちらかと言うと、自分は後者であった。どうせまた授業もロクに聞かない奴なんだろう。
「ということで柳　巧、皆仲良くしてやってくれ」
教師も、興味など全くないらしい。
尤（もっと）も、授業も聞かない生徒が集まった学校だ。こいつも同類と思ってるんだろう。
「柳、オマエの席はあそこだ」
俺の席の後ろだった。
転校生が自分の席の後ろに来て、そこから物語が進展、なんてーのはよくある話だ。
まぁそんなの空想上の話だ。気にしないほうがいい。
そんなこんなで、転校生が来た今日も学校は特に盛り上がりを見せなかった。

だがこの転校生、ただ者ではなく今後、路弘をとんでもない話に巻き込むのであった。
しかし、路弘はそんなことは知る由もなかった―。

1話　転校生（後書き）

1話、最後まで御読みいただきありがとうございます。
つまらなかったかも知れませんが、次回もお楽しみに。

2話　俺（前書き）

そんなこんなで2話投稿。
「こんなクソ小説2話もいらねぇよ」とか思うでしょうが、暇なんです。許してください。

2話　俺

―8月24日。特に蒸し暑い。
今日も珍しく教室は異様な雰囲気を漂わせていた。
それもそのはず、こんな中途半端な時期に転校生が来たのだ。
転校生はまだ学校には来ていないらしい。
登校時間は8時20分、現在8時17分。
転校して初日から3分前まで学校に着かないとは時間にルーズな奴だ。
8時19分、転校生が来た。何という計算しつくされた登校だ。
チャイムが鳴った。生徒が席に着く。もちろん転校生もだ。
「はじめまして」
後ろから聞きなれない声が。転校生が話しかけてきた。
生徒の一部がザワめきこちらに視線を向ける。
大抵転校生というものは、初日はなかなか自分から発言はしづらく、仲良くなるとしたら誰かに話しかけってもらってそこから…ってパターンだろう。
「や、やぁ」
「柳巧って言うんだ。よろしくな」
「あ、ああ。よろしく」
なんて馴れ馴れしい。自分はこのタイプはあまり好かない。
とりあえず授業中は、授業に集中してる「フリ」をして会話を避けた。

―1時限目終了。
俺は誰よりも早くトイレへ向かった。
トイレへ行きたかったのと、転校生との会話を避けたいのが混ざり、自分の動きが高速化した。
そしてトイレから帰ってきても、いつもはすぐに席に着くが今日は

着かなかった。
遠目から転校生の様子を探っていたのだ。
顔を見てみると（ほとんど顔は拝んでいなかった）完全に平和主義者の顔であった。
特に変わった顔をしているわけでもなく、不細工でもない。
だが多少美男子であった。
そして一番気にかかったのが、誰にも声をかけなかったことだった。
何故自分にだけ声をかけたのだろうか。
転校生は一番後ろの席だが、左にもう一人生徒がいる。
しかし声をかけることはなかった。
「なんなんだ？」
嫌な気配がした。

―４時限目終了。
自分はもう転校生の感じにも慣れていた。（といっても会話をもなく）
まぁ転校生が来ても俺にはなんの影響もないだろう、と思っていたその時。
「路弘君、昼休みちょっと屋上まで来れないかな？」
…なんだ？なんで俺が呼び出されるんだ？俺が何をした…！
いや、落ち着け俺。
何があるともわからんが、とりあえずここはＯＫをだしておこう。
「ああ、わかったよ」
今は昼食の時間。昼休みまではあと２０分ほどある。
どうも落ち着かないがとりあえず昼食を終えた。
生徒も俺の方を遠巻きに見ている。
そりゃそうだ。
転校生が登校２日目に一人の生徒を呼び出しなど普通じゃ絶対にない。
「まぁなるようになるよな…」

そう自分に言い聞かせて、屋上へ向かった。

「やぁ、来てくれたんだな」
「ああ。ところで何のようだ」
本来とっとと帰りたいところなんだがな。
昼休みは２０分。自分の時間を過ごしたいんだが…。
「路弘…だったか」
「ああ。柳だったか」
「巧でいいよ」
「そうか」
とっとと用件を言え。
「ところで、何の用だ？」
「まぁ、単刀直入に言ってしまえば君はまるで信じられないんだろうけど…」
「なんだ、そんなスケールのデカい話なのか？」
「一般人じゃ考えられないスケールだな」
「ちょっと怖いけど言ってみろよ」
「じゃあ言うけど…」
巧は改めてこっちを向いた。何だ、気色悪い。
「君は普通の人間じゃないんだ」
「…なに？」

2話　俺（後書き）

今回は路弘と巧の正体が明らかになって行く…という伏線です。
比較的次回が楽しみになる終わり方かなーと。
是非、次回もお楽しみに！（てか、1話が短すぎるかな？）

3話　地球上の主人公（前書き）

特に何も。

3話　地球上の主人公

「君は普通の人間じゃないんだ」
「…なに？」
コイツは何を言っているんだ？
俺の有意義な昼休みを邪魔した挙句、こんな訳の解らんことを言い始めた。
しかし、巧はマジだ。映画の見過ぎとかってレベルじゃない。
「なにを言ってるんだ？」
「聞いていなかったのか？」
「いや、聞いてたけどさ」
「まぁ普通に聞いてもなんだそりゃって話だよな」
「わかってるなら説明を頼む」
「君は、この地球の中心となっている人物なんだ」
「そんなこと言われてもわからないって。詳細の詳細を頼む」
「まぁ…長話になるけどそうでもしないと信じれないよな」
どっちみち信じる気なんかほとんどなかった。というより信じれないだろう。
「路弘、君はこの地球上で他の人間には持っていない能力を持っている。
今まで、幸運があったり自分が描いたシナリオ通りに物事が進んだり、
そんなことはなかったか？」
「あるっちゃある。体育のバスケットで８本中８本全部シュートが入ったとか」
小規模。
「自分が望んでいたものが手に入ったり、理想と現実が重なったり。
百発百中って訳ではないだろうが、そういう事は多いはずだ」
「じゃ今俺が、今日突然休校になれーっなんて思えば、そうなるの

か？」
「それはわからないけどね」
「て言うか、何故こんな特殊な能力が俺にあるんだ？
他の人間にはないのか？本当に俺一人だけが持っている能力なのか？」
「私が知っている限りでは君一人」
「何故だ？」
「おそらくだが、神が君を選んだんだよ」
「神が？」
「そうさ。君は地球上の主人公なんだよ」
完全にマンガの話だ。
「そんな話あるわけないだろう。現実を考えてみろ」
「今自分が生きている次元が現実とでも思っているのか？」
「なんだそれ？」
「私らの現実は神から見たフィクションなんだよ」
「…」
「アニメや漫画の世界が2次元としたら、我々が生きている世界は3次元、
そして神が生きている世界は4次元になる。
アニメの世界の主人公から見れば、そこが、2次元が現実なんだ。
そして我々の生きる3次元はフィクションになる。
まぁ4次元なんて神しかいないだろうがな」
「4次元…」
「そうさ」
「お前その話マジでしてるのか？」
「冗談で昼休みを潰す程アホじゃないよ俺は」
転校してきて2日目、呼び出しを受けて屋上まで来たらなんだこれは。
謎はまだまだたくさんある。こっちから聞きたいことまでたくさん出てきた。

だが今は黙って巧の話を聞こう。
と思ったところでチャイムがなった。
腕時計を付けていたのだが、話に夢中になっていて時間に気づかなかった。
「おっと、時間のようだな。つまらん話に付き合わせて悪かったな」
「最後に一つ聞くが、コレは事実なんだな？」
「紛れもない事実だ」
「そうか…。俺からも聞きたいことがあるから、また」
「わかった」
巧より一足先に、屋上を後にした。

…俺は一体何者なんだ。
こんなに自分に恐怖を抱いたのは初めてであった。

3話　地球上の主人公（後書き）

さて、今回は如何だったでしょうか。
段々とスケールがデカくなっていき、破茶滅茶になってきました。
次回どんな話になるのか、自分でもイマイチわからないのですが、
次回もお楽しみに。

４話　１００の謎（前書き）

段々クソになってきました。
カンベンシテクダサイヨー。

4話　100の謎

―8月25日。
巧のお伽話を聞いて翌日。
あの悪夢のような話が頭から離れず、夜はイマイチ眠ることができなかった。
いや、あんなのは所詮(しょせん)ドッキリさ。
今学校に行けばきっと「ドッキリ大成功」と書かれた看板でも掲げているんだ。

―学校。
生徒は面白そうにこちらを見ている。
看板を用意しているわけでもない。
昨日の呼び出しが余程気になるんだろう。
「昨日なんて言われたんだ!?」
生徒の一人が話しかけてきた。
「いや、特に何も…」
「っんだよーつまんねぇー」
いや、つまんねーって言われてもだな…。
生徒の一人は生徒グループの方に戻って「何もなかったってよー」と言っている。
どうやら俺から話の内容を聞くための囮(おとり)だったようだ。
そして問題の巧の方も「昨日なんて言ったんだ」的なことを聞かれていた。
「特に何も話してないよ」
の一点張りで通しているのだが、どうしても生徒がしつこく引き上げないらしい。
―チャイムがなった。

巧は草臥(くたび)れた感じでため息をついた。
俺は授業なんかより、昨日の話がすごく気になっていた。
そんなわけで、1時限目の授業はほとんど話を聞いていなかった。

―4時限目終了。
基本昼食中はどこで昼食をしようとOKなわけで、そのまま昼休みに縺(もつ)れ込む。
つまり、昼食から自由タイムなわけだ。
それを利用して、昼食時俺は巧を連れて屋上へ向かった。

―屋上。
「昨日の話が気になるようだね」
「当たり前だろ」
むしろ気にならないほうがおかしい。
「早速だが質問に入る。神は何故、俺を選んだんだ？」
「そんなことは神にでも聞かないとわからないさ。選んだのは神だからね。
ただ言えることは、君には神を惹きつける“何か”があるんだ」
「その“何か”というのは具体的にわからんのか？」
「そいつは神に直接聞くしかないだろう。
例えば君がチョコレートでも買ったとして、なんで買ったのかと言われても、
本当の答えを知るには君に聞く他はない」
巧の例えは普通とは少し違う感じがする。間違っているわけではないのだが。
「屁理屈め」
「屁理屈ではないさ。
じゃあ私の誕生日を当ててみろよ。誰に聞いてもいいぞ」
「くっ…」
妙な敗北感。

「そうなるだろ。私に聞く以外手段はないのだ。因みに私は11月21日だ」
「俺は7月12日…ってそんなことより」
思わず対抗してしまった。
「何故お前がそんなこと知ってるんだ？
神が選んだならこのことは神しか知らないんじゃないのか」
「ふむ、確かに。
だが、私には何故か解ってしまってね。これも神の仕業だろう」
「どういう風に解るかって聞いても答えづらいか？」
「まぁ答えづらい。
ただ、神からの声が聞こえるんだよ。馬鹿馬鹿しい話だがね」
「馬鹿馬鹿しすぎるよ」
正直、自分でも驚いている。
ここまでしっかりと返答されると、信じざるを得ない。
「神…か」
「どうしたんだい？」
「そもそも“神”ってのはどんな奴なんだ？」
「神は神。我々にとっては全てを握る者さ」
「神に会うこととかできるのか？」
「そりゃあ無理さ。神は実在しないんだからな」
「じゃ神が俺を選んだってーのは…」
「事実さ。
神はそもそも実在しない物体なんだ。だから神なんだ。
だが我々にはそれ相当の仕打ちをしっかり与える…実体のない、それが神さ」
「じゃ神に会うなんて」
「無理だね」
「じゃあ永久に俺を選んだ謎はわからないのか…」
「そうなるね」
学校で何の話をしているんだか。

ただの怪奇現象マニア同士の会話じゃないか。
「じゃあ何故神なんて言葉が出てきたんだ？誰も実体を見たわけでもないのに」
「それは人間の仕業さ。
“人間”なんて言葉が何故出てきたのかと言われても、昔の人が作った。
大抵はこの答えにしかならないだろう。後は補足で“人間”までの成り行きか」
「じゃあ何故神はこんなに凄い人にされてるんだ？
俺達と同じで一般人かも知れないじゃないか」
俺も巧も既に一般人ではないんだがな。
「例えばそこに箱があったとしよう」
また物凄い喩(たと)えを聞かせてくれるのか。
「その箱に“宝”と書いてあれば、中にゴミが入っていようと、
それを確認しない限りそれは“宝”なんだ。
中身のゴミを確認して宝ではないと証明すれば箱の中身はゴミ。
だが宝を信じて最後まで箱を開けなかったらそれは例え中はゴミでも宝になる」
面白い例えだ。この例えは確かに納得する。
だが…。
「…結局何が言いたいのか、分かりやすく単刀直入に言ってくれ」
「そうだな。
神なんて物体が実在しなくとも、神の言葉の創始者が「神は凄い」と言えば、
誰も神を見ることなどできないわけだから、神は凄いんだ。
例えその凄い神がどんな汚れた下郎だろうとね。
神と書かれた箱に、人間が「凄い」、「ゴミ」どちらをを入れたかって話しさ」
神がゴミはないだろ…。
面白い話だったがここでチャイムが鳴ってしまった。

「おっと、チャイムだね」
「まずは俺の正体より神の正体を暴くべきだな」
「そうなるね。神の正体を暴かない限り君の正体も暴けないからね」

—授業中。
結局今日の昼は、自分のことを聞くつもりだったんだが神の話になってしまった。
明日も色々楽しそうだな。

4話　100の謎（後書き）

…なんだコレ。

5話　そしてまた1人（前書き）

さて5話。
もう自分でも何も言えません。

5話　そしてまた1人

―8月26日。木曜日であった。
いつも通りの登校。この時点ではだ。
学校へ着くとまたアホ臭い話が始まる。

―学校。
学級に響動(どよめき)が。
また巧が何かをやらかしたのか？
ああ、きっとそうだ。そうでもなけりゃこの学級に響動が訪れることは無い。
自分は、一部の生徒の話に耳を傾けた。
「おい、知ってるか。また転校生来るらしいぜ」
！？
おいおいおい、また転校生か？
また変な奴でも来たらどうするんだ。後ろの席をチラリと見た。
まだ居ないようだった。巧のことだ、どうせ分かってるんじゃないのか？
「おー、席につけー」
相変わらず死んだような声で教師が言う。
「今日も転校生がくるぞー」
今日「も」転校生が来る。普通は絶対に使うことのできないフレーズだ。
「おい、入って来い」
女だった。
「林(はやし)　抄奈(さなか)加です。宜しくお願いします！」
美少女だった。
男子はこの時に限って騒いでいる。
「お前の席はあそこだ」

俺の席の左後方だった。云わば巧の左。
転校生は大体席が空いていないから後ろの方に位置づけられる。
そのポジションが俺を堪らない疑問の渦へと巻き込んでいく。
コイツは普通の人間なのか？ただの美少女か？
それともまたとんでも無い奴なのか？—疑問が絶えない。
「ヨロシクね、路弘クン！」
「あ、ああ、ヨロシク」
意外と愛想の良い子だ。
周りが「ヒュー」等と言って騒ぎ立てる。野次馬とはこの事だ。
「おーい、静かにしろ」
教師がどうでもよさそうに言った。
「林　抄奈加、皆仲良くしてやってくれ」
ゲンキンな奴らだから、どうせこの時は積極的に絡むんだろう。
自分も美少女というだけあって、いつもよりテンションはやや高めだった。
その分、疑問もたくさんあるのだが。

—4時限目終了。
また巧を連れて屋上へ向かった。

—屋上。
「ふー…」
「まだ色々と疑問があるようだね」
「疑問だらけだよ」
寧ろこの疑問が1日で解決したらそれこそ疑問だ。
「さて、早急に質問したいのだが…」
「まぁ待ちたまえ、5分ほど昼食の時間をとろう」
「え？何故だ？」
「まぁまぁ…」
何だコイツ、どうせまた何かをしようとしているんだ。

コイツの場合は何をするか解らないからかなり怖い。
まして今までは昼食中でもお構いなしに質疑応答を繰り返していた。
―そして5分程たって、巧が「そろそろかな」と言った。
屋上の扉が開いた。
「やぁ！」
転校生の林　抄奈加だった。
これは…一体なんなんだ…！？

5話　そしてまた1人（後書き）

5話、御読みいただき有難う御座います。

話の内容に詰まったので、また転校生を連れてきちゃいました。
この先話の内容に詰まったらいくらでも転校生が来ます（！？）。

とりあえず、次回は転校生は連れてきません（当たり前だ）。
お楽しみに～。

6話　神を知る者（前書き）

さて、ストーリーがグチャグチャだ。どうしようか。

取り敢えず、頑張って楽しんでください。

6話　神を知る者

「やぁ！」
…何故、何故抄奈加がここにいるんだ？
「そろそろ来ると思ってたよ」
「アンタも只者じゃないね」
何なんだ、こいつら。
巧は抄奈加が来るのが分かってたようだ。
「君もな」
「私は単なる極普通の人間だよ。
屋上でゴハン食べたいなーって」
「そんな嘘バレバレだよ」
「えへ、やっぱり？」
「お、おい、どうなってるんだ？」
「君にはサッパリわからんだろうな」
「ああ、サッパリ」
「アタシ達、普通の人間じゃないってことはわかるよね？」
「ああ、わかる」
「そういう人達って、何か波長みたいなものを感じて会話みたいなのが出来るんだ」
「へ、へぇ、そりゃあまた…」
「ところで、抄奈加。君が普通の人間じゃないってことはわかるが、君がどんな能力を持っているのかを知らない」
「私に特殊な能力なんてないよ。
ただ、余計な知識を持っているというだけ」
「余計、ね。それが僕らには必要なのさ」
「わかってるんだね」
待て待て、俺がここにいるのは場違いな気がする。
明らかに話のレベルが違いすぎる。

「さて抄奈加君、今僕達がどの様な話をしているかはわかるかい？」
「んー…路弘君の正体を話してそこからってのはわかるけど…今の段階は」
「まず、“路弘の正体”から“その能力の発端”そして“それは神”神とは？」
「なるほどネ」
「君なら神の正体を知ってるのではと思うのだが」
「なんて図星！」
「そうでなければここに来ないだろう」
「あ、あの…あんたら…」
「大丈夫だよ、路弘。
抄奈加君は今我々が疑問に思っている神の正体を知っている」
「あ、ああ、そうなのな…」
そして、少し落ち着いたところで質問をした。
「ところで、抄奈加と言ったか。
何故こうもタイミング良くキミが転校してくるんだ？」
「私も同じく“神”の仕業だよ」
「何だ、また神か。神も好き勝手やるな」
「神は誰にもとらわれないだろう」
「さて、その神だけどネ…そろそろ正体を話そうかなーと」
「ほら、御待ちかねの神の正体だぞ、路弘」
「巧だってそうだろう」
その言葉通り、自分は緊張というか期待というか、そういうものでいっぱいになった。
「ちょ、ちょっと待ってくれ」
「ん？」
「まず抄奈加の正体を知りたいところだったんだが…キツいのか？」
「んー…巧と一緒。自分のことがイマイチわからないのよネェ」
「そうか…」
これ以上深く質問すると、自分が話についていけなくなりそうだ。

この辺で辞めておくことにしよう。
「じゃ、そろそろ正体、話しちゃおっか！」
「軽いなぁ…俺はちょっと震えそうなくらいだぜ」
「へへ、大丈夫だって。そんな怖い話しないよ」
いや、大丈夫じゃない。
キミと巧の存在だけで今恐怖を感じているほどだ。
その上、神がどうとか言われちゃ、余計に混乱しそうだ。
その心とは裏腹に、抄奈加は神の正体を語り始める―。

6話　神を知る者（後書き）

さーて、今回は割と短め？でしたでしょうか。

次回、お楽しみにw

7話　What is God?（前書き）

さてさてなんだかんだで7話です。
自分でも今後どの様な展開にしていくか悩んでいたところです。ヘハ。

7話　What is God？

「神。
キリスト、イスラム、ユダヤ、仏教等々、それにはそれの神がいる。
この漢字の神には、不思議な能力、目に見えない、ずば抜けて優れた、
などと言った意味が含まれているの。
我々人間にとっては、非常に頼もしい存在であることが言えるんだ。
“神頼み”なんて言葉もあるしね。
今、世界で最も信者の多い宗教がキリスト教の約２０億人。
順にイスラム教徒約１１億、ユダヤ教徒は知らない。仏教は少なく約１億。
ま、結局これらの神は今の私達にはほとんど無縁なわけだどね。
今言った話だけど、要は何が言いたいか判る？」
おい、わかるか。
「神にも色々と、それにはそれの神がいるって事を言いたいんですね」
「さっすが巧クン」
なんでコイツはわかるんだ。
神とは？と訊かれると、答えれないものだなーと、改めて思っていた。
「つまり、我々には我々の神がいる、と言うことだな」
「そ。つまり、路弘クン専用の神がいるの。専用って言うかなんて言うか」
「俺専用の神、ね…」
俺が想像していた、雑用的な専用ではないだろうな。
そこでふと頭に湧いてきた以前の巧の言葉。

「巧が、俺には神を惹きつける何かがあると言っていたが、それはなんなんだ？」
「巧クンに聞いたんじゃないの？それは神しか知らないって」
そりゃ聞いたけどさ。納得出来ないだろ。
「でも、神は空想上の人物なんだろ？」
「わからないよ？我々の神はもしかしたら実在するかもネ。
不思議な能力って意味を持ってる神って言葉だしね」
不思議すぎる。だからこそ神なのだろうが、いくらなんでもな…。
「つまり抄奈加さん、我々も神を惹きつけてしまったわけですね」
「そう。良し悪しはわからないけど」
悪い。圧倒的に悪いの優勢だ。
俺はこれから何かに巻き込まれそうな気がしてならない。
俺の神よ、とりあえずこの夢のような現実を元に戻してくれー。ｏｈ　ｍｙ　ｇｏｄ！
「そもそも、その神だ。何故(なぜ)出現した？原因はなんだったんだ？」
まずこれだ。この神さえ現れなければ何もなかったんだからな。
「うーん、原因は私たちにあるんじゃないかな？
そうでなければいきなり神が出てくる訳ないじゃん？」
「まぁな…」
ここで巧が口を開いた。
「わかりませんよ。
もしかしたら、私達以外の何らかが原因で神が出現し、
その神が唐突に我々を標的にし、何かを引き起こしたということも考えられますよ」
また難しそうな事を言いやがって。
そう思ったところで巧が続けた。
「或(ある)いはそのキリスト、イスラム、ユダヤ等の崇(あが)められてきた空想の神が
今になって現実のものになったかも知れません。
つまり、通常では考えられない“神の実在”ですね」

「巧クン、イイトコいくね～」
「いえ、全然です。ただ適当な勘です」
嘘つくな。バレバレだぞ。大体考えてたんだろうが。
「さてと…これから俺達の具体的な目的は何なんだ？
いきなり現れた神をなぶり殺しにでもするのか？」
「適当な事、言わないでよっ。
とりあえず、まだまだ神に対する情報が少なすぎる」
「つまり、まだ情報集めをする必要があると言うことですか」
「そうね」
…くそ。ついていけん。
こいつらだけで、勝手に神情報集めてりゃいいのに。俺は参加しなければいけないのか？
「情報集めは、俺も参加するのか？」
「当然！忘れてるかも知れないけど、神のお目当ては路弘クンなんだからね？」
「はぁ…わかりましたよぅ」
「それでいいの！」
クソ。クソックソッ。結局そうなるのか。
神は、俺のどこが良くて惹かれたのか、まったくもって理解出来ない。
俺よりも魅力のある奴なんかわんさか居るだろうよ。
むしろ俺より魅力の無い奴がいるのか？もしどこかにいたら、ここに来い。
「それより、これから情報を集めるらしいですが、それ以降はどうするんですか？」
巧が弁当の玉子焼きを食べながら言った。
「とりあえずは情報を集める。それ以降はそれから考えるの。
もし情報を集め終わって、納得出来る事実が得られたらそれで良しだし」
抄奈加がお茶をすすりながら言った。

俺はといえば、こんな話を聞きながら弁当を食べるなど高等技術は出来なかった。
玉子焼きをつまめば落としそうで、お茶を飲んだら吹いてしまいそうだ。
「っと、そろそろ時間ですね」
「そうだね。じゃ、また明日」
「あ、ああ、そうだな」
「どうしたの、路弘クン。顔色悪いよ？」
「いあ、なんでもない」
人事みたいに言いやがって。訳わからんこと言うから頭がショートしそうなんだよ。
今日は、ちょっとはマシな方だぞ。慣れてきたからな。

―放課後。
教室がざわめく。
巧と抄奈加は何事もなかったかのように帰っていく。
もっとも、あいつらにとっちゃ何事も無かったんだろうけどな。
俺にとっては、今にも頭痛が起きそうな話だったんだが…。
さて、明日はどんな話が待っているのやら。

7話　What is God?（後書き）

さーて7話終了です。
神については自分が知ってる範囲のみで書きましたので。…ハイ。
今後、展開がグチャグチャになることを想定してください。
閲覧ありがとうございました。

8話　襲来（前書き）

さーて8話です。投稿が早かったです。
はっは、自分でも原稿見直して笑うしかなかったです。

8話　襲来

―8月27日金曜日。
特に暑くも寒くもない、申し分のない天候だった。
今日も呑気に登校していく。
ただ、アイツラの所為(せい)で、退屈はしないような気がする。
過激すぎてもまた頭痛が起こるだけだから困るんだがな。

―授業中。
何をするわけでもない。ただダラーとしてるだけだ。
後ろ辺りにいる2人は何もしゃべらず、極普通に授業を聞いている。
これが昼休みになると、一変するんだからな。怖い。

―昼食兼昼休み。
俺はいつもなら即座に二人に呼び出され屋上へ行くところだが、
戦に備えてトイレへ向かった。準備万端にしないとあの二人に倒さ
れる…！
そして俺は誰に呼び出されるわけでもなく、屋上へ向かった。
案の定、二人はいた。
「こんにちわ」
「やっぱり来たんだネ」
じゃあ帰ってやろうか畜生め。
「と言うより、今日来てもらわないと困るところだったんだよ。ね、
巧くん」
「そうですね」
こいつら二人の会話には妙な恐怖感を抱く。
何かとんでも無いことをしてくれそうで…ああ怖い。
「で、さっさと内容を話せ」
巧が鼻でクスッと笑った。

そして、表情を一変させマジな顔で言い出した。
「ハッキリ言います。今日あなたに何か“危険な事”が起こります。
何が起こるかはわかりません。
そしてそれは、あなたの存在を憎む者が仕組んだ事だと考えられます」
「俺の存在を憎む者？誰だそれは」
「それがわかったら苦労はしませんよ」
俺はクラスメートをいじめたことなど一度もないんだが…。
「そいつは俺の身近にいるものなのか？」
「いいえ、あなたがまるで知らない存在だと思います」
だろうな。俺がこの学校で話す奴と言えば、こいつら二人だけだ。
「ただ、あなたが思ってるよりも遥かに危険なことが起こります。
肝に命じておいてください」
「その危険度を表すことは出来ないのか？」
「ふーむ…その、あなたを憎むものがあなたに“死”を渡すかも知れません」
俺に耳には「シ」と聞こえた。たしかにそう言ったはずだ。
なんなんだ？サッパリワケがわからない。どうしてなんだ？
よく理解できん…「シ」って何だ？四か？師か？まさか死か？
「おい、“シ”って何のことなんだ…？」
「他界、逝去の事ですね」
ふざけるな…ふざけるなよ…。
なんで俺がこんなことで死に巻き込まれなきゃいけないのだ。
俺はもっと平凡で何事もなく残る余生を過ごして行きたかったんだ。
「つまり、何か。俺が憎くて殺すわけか」
「そういうわけですね」
巧は当然のように言った。
「で、俺はどうしたらいいんだ？大人しく殺されてりゃいいのか？」
「それが一番困ります。
神があなたを選んだのに、あなたに死なれてしまっては…」

「別にいいんじゃないのか？俺以外の奴でも」
巧は少し呆れた顔をした。
「あなたは何も分かっちゃいないんですね。
まず確実に言えることは、あなたを殺した者を神は殺します。確実にです。
その後、神がそのまま安静にしていてくれればいいのですが、
下手をしたら神が激怒し、世界をメチャクチャにしてしまうかも知れないのです」
…じゃあ俺を殺した奴が死ぬのは間違いないんだな。可哀想に。
そして、それからしばらく俺は発言することはなかった。

―放課後。
とりあえず、昼休みからは何事もなく平和に過ごしていたがこの後だ。
俺が単独になったところを狙ってくるに違いない。
巧と抄奈加は帰ってしまったようだ。手助けを願いたかったのだが…。

単独になったところは怖い。いつくるのか。
自分の家は、学校から１ｋｍほどとそれほど遠いわけではない。
だが、その１ｋｍをやたらと遠く感じさせる。恐怖でいっぱいになる。
俺は何も考えず、無心で歩いた。早く家に着くことを祈り。
我が家まであとコーナーを３つ。何も起きない。起きない…。
１つ目のコーナーを曲がる…。何もない。
２つ目のコーナーを曲がる…。まだ何もない。
最終コーナー。覚悟を決めた俺は振り返った。
「よく気づいたな…」
俺の背後にいた人間。いや、人間なのか。
俺の背後にいた“物体”が俺を憎んでいる者だと言う事にはすぐ気

づいた。
何しろそいつは今にも俺を殺さんばかりの目で睨み、
その体中から憎しみ、殺意がこもったオーラを俺はたしかに感じた。

8話　襲来（後書き）

さて、主人公は死ぬのか！w

うp主が面倒くさがって殺すというストーリーもありますからね（

をい

次回をお楽しみに！

9話　Battle！（前書き）

さて9話です。
もう何も言いません…。

9話　Ｂａｔｔｌｅ！

俺はどうすることも出来なかった。
明らかに俺が敵う相手ではない。普通の高校生と喧嘩しても負ける。
加えてコイツは普通じゃない。巧と似たような感じのハズだ。
「お前の所為で…俺は苦しみを味わされたのだ…」
言葉で言ってどうにかなるものじゃないと思いながらも、説得を心がける。
「俺が何をしたんだ、俺自身は何もしていないはずだ！」
「お前の…存在…」
説得力のある答えで困ってしまった。どうする、どうする…！
「待ってくれ、俺は…その…！」
「死ね…」
マズい。これ以上でもなくこれ以下でもない、最期の言葉だ。
俺はもう死ぬんだな…巧に注意されたにも関わらず…。
ソイツが手をさし出すと、空気がソイツの手に吸い込まれていっているようだ。
そして、手から赤い玉のような物が出た。
やはりコイツは人間じゃなかったんだなと、死に際の思想。
赤い玉を俺に投げつける動作をした。
だが、赤い玉は妙な爆発音と共にどこかに飛んでいき、よくわからない場所で爆発した。
なんだ、牽制か？
「路弘さん、ご苦労さんです。後は僕に任せてください」
牽制と思った俺の前に現れたのは巧だった。
「巧…！」
「あなたは何も考えずに逃げてください。その際は護衛しますので」
逃げるって…目の前に家があるのだが。
「家の中に逃げこむのは危険か？」

「危険ですね。理由を説明してる暇はありません。はやく！」
巧はアイツの攻撃を避けながら、弾きながら話した。
ここで質問攻めするのは巧にとってかなりの迷惑だとわかった。
俺は一目散にアイツの目の届きづらいような場所へ走った。
「こざかしい、喰らえ！」
青白い光が俺の方へ向かってくる。だが、巧がうまい具合にそれを弾く。
「路弘さん、アイツから逃げる方法は目の届かない場所へ行くのではなく、
とにかくアイツから距離をとってください！」
「わ、わかった！」
巧の言うとおり俺は全力で逃げた。
だが、俺は１００ｍ１７秒という鈍足。当然すぐ追いつかれるわけなのだが、
巧のおかげで何とか距離は広がっていってるようだ。
「おのれ、逃さぬわぁ！！」
それに比例して、アイツの攻撃の精度もかなり落ちてきているようだ。
速すぎて見えなかったアイツの攻撃も、わずかながら目に見えるようになってきた。
「巧さん、細かい説明は後（のち）の学校で。あとアイツから５０ｍでいいです、
頑張って離れてください、そうすればあなたは確実に安全です」
巧との距離は３００ｍ程あるというのに、巧の声がたしかに良く聞こえた。
疑問が残ったわけだが、今残すべきものは疑問ではなく自分の命。
ひたすら走った。
「よく頑張ってくれました、路弘さん。もう家に帰っていいですよ」
そう言われて自分はワケがわからなかったが、今は巧の言うとおりにした。

帰ってみると、空に半径２００m程のドーム的なものがある。
恐らく、あの中で巧とアイツが戦っているんだろう。
しかし巧が確実に安全と言うことは、巧はアイツに勝てる自信があったんだろうか。
もう体力は限界だ。とっとと家に帰ろうとしたその瞬間だった。
空中から爆発音がして、ドームらしき物の所を見てみると、ドームはなくなっていた。
「終わりましたよ」
「ぅぉわぁっ！」
俺は尻餅をついてしまった。目の前に巧がいた。早い、速い…！
「び、びっくりした…アイツはどうなったんだ？」
「消滅しました」
「倒したってことか？」
「はい。もう二度と出てくる事はありません」
何となく自分は安心した。
「詳しい話はまた今度、学校で聞かせてもらうぞ」
「ええ、わかりました。では私も家に帰るとします」
こいつの家がどんなところか異常に気になる。
どうせまた普通の家じゃないんだろうが、この際それは訊くまい。
「もう普通に帰っても安全なんだろうな」
「安全です」
「そうか。じゃあ俺は帰る」
「おやすみなさい」
巧は微笑を浮かべて、俺を見送った。
巧も変な魔法みたいなものは使わずに、普通に歩いて帰った。
帰るときの術は無いのだろうか。
自分はヘトヘトだったため、家に帰ったら飯も食わずに寝てしまった。

9話　Ｂａｔｔｌｅ！（後書き）

さーて主人公は生き延びてしまいました。
てなわけで残念ながら完結しませんｗ

次回、話の内容につまりますがお楽しみに！

１０話　戦後（前書き）

何も言いません。

１０話　戦後

８月２８日土曜日。
学生（と言うより帰宅部）にとっては、土日は天国だ。
実は、親も俺が小さい頃に亡くなって、一人暮らしをしている。
その所為か、天国といえども暇で仕方がない。

その暇を解消したのが、俺が起きた２時間後の正午に１本の電話だった。
「こんにちわ」
声だけでわかった。
「巧か」
「もし違ったらどうします？」
「もしと言うことは巧なんだな」
「ふ、お手上げです」
相変わらずまわりくどいことをする奴だ。
「で、用件は何だ」
「１３時、つまり１時頃からお時間を頂けませんか？」
俺にはすぐわかった。
「昨日の話だな」
「その通りです。詳しい説明をしないとあなたも納得されないと思いましてね」
「まったくだ」
「では、１時頃私の方からお迎えにあがりますので」
と言い残して巧は電話を切った。
自分もこの話には興味を持っている。
いや、興味なのか。どちらかと言うと疑問が多いからそう思えるだけだろう。
今から飯食って、適当に準備してればいい頃だろう。

インターホンがなる。カメラに巧が映る。こうしてみるとイケメンだな。
「お迎えに上がりました」
俺は何も答えずに玄関を出た。
玄関の外にはタクシーが一台。それに乗って行こうというのだろう。
「どうぞ」
タクシーのドアを開ける。そこまでされると緊張するぜ。
「この運転手のお方は、私の所属の…まぁグループみたいなものですか。
　そのグループ人なので、特に気をつかわないでもいいですよ」
いやいや、尚更気をつかうところだろうお前の所属の人なんだろ。
とんでもない。
「名前は言えませんが、あだ名の様なものでは「F」と言われています」
「あ、ああそうなのか…」
相変わらずサッパリだから、頼むからこう一方的に話を進めないでくれ。
「そういう事なのでFさん、お願いします」
何がそういう事なんだ。その疑問をよそに、タクシーはゆっくり発進した。

―車内。何のBGMも流れない静かな空間。
「あまり、固くならないでください」
「そ、そうか」
固くなるだろ…巧だけでも普通は固くなるぞ。それに＋αでFとかって人もいるし。
「お話は目的地に着いてからするので」
さっきまでは、疑問が多くて早く訊きたかったところだが、今は違う。

このFさんのせいか、妙に緊張してきた。むしろ怖いくらいだ。
それから30分後、目的地に着いた。緊張がさらに高まる。
「着きました」
着いたところは極普通の公園だ。何があるわけでもない。
普通の滑り台、普通の砂場、何もかもが普通だ。
特に遊び道具に仕掛けがあるというわけでも無さそうで、子供も遊んでいる。
こんな子供に混じって話をしようと言うのか？
「おい巧まさかここで…」
「ハハハ、別にここでお話をするわけではありませんよ」
「じゃあ、どこでするんだ」
巧はあたりを見回した。
「こっちです」
公園から細道に出て、全く人目のつかないところに移動した。
「目をつぶって、私に手を触れてください。直ぐ済みます」
「な、なんだって？」
何なんだ、気持ち悪い。だがここで冗談が飛び出すわけも無いと思った。
「…わかったよ」
俺は巧に触れ、目をつぶった。何をするのか、恐怖。
「もう結構です」
俺が目を開き、あたりを見回すと薄暗くなっていた。さっきまでは明るかった。
日が沈んだのか？いやいや、まだ2時だ。早すぎる。
「巧、何をした」
巧は鼻で笑い、手招きした。移動先はさっきの公園だったが…。
「こ、これは…！」
周りのものが一切動いていない。
さっきまで元気よく遊んでいた子供たちは、全く動かない。ピクリ

とも動かない。
何の音もない。ＢＧＭのない静まり返った車内よりも静かだ。まさに無音。
「巧、お前いったい何をしたんだ！」
「それも含めて、先日の事をお話しようかと」
俺はその場で黙りこみ、ただ巧を見ていた。

１０話　戦後（後書き）

何も言いま（ｒｙ

11話　ちゃんと、言えよ！（前書き）

タイトルの適当さに何か言われそうなのはわかっています。
正直言うと、タイトル全く思いつきませんでした。

11話　ちゃんと、言えよ！

「周り一帯の時間が止まっているのか！？」
「まぁ落ち着いてください。正解ですがね」
巧は鼻で笑いながら言った。
「さて…どこからお話しましょうか」
「どこからも何も決まってるだろ。今何をしたのか、それと昨日の事についてだ」
こいつと会う度に、何かしらの疑問がセットとして付いてくる。
退屈しのぎには丁度いいかと思ったが、改めて考えると過激な疑問しか付いてこない。
「さて…昨日と今、どちらを先に話しましょうか？」
「現状を把握しないと俺も落ち着けそうにないので、今のことを先に頼む」
「了解しました」
巧は一度目を閉じ深呼吸をした。
こいつは何か真面目な話をするときは、深呼吸をするようだ。
「さて、今は私の能力によって周りの時間を止めている状態です。
今全世界の時間が止まっています。
つまり、私がこの能力を使っている間は何も起こりません。
一部を除いて」
「一部？」
「ええ、一部です」
嫌な予感がする。俺が家に帰るまでに絶対何かが起こる。
「この空間に入ってこれるとしたら、私が指定した人間。
その他には、なんらかの能力を持っている人間」
ますます嫌な予感がする。
そういう、能力とか変なこと言わないでほしいんだがな。

「大体、ここに入ってきても一文の得にもならないんで出現率というか、
それは低いと思いますよ。
入ってくるとすれば、内部にいる人間たちになんらかの用があったり…」
俺は昨日出会った良く解らん奴を思い出した。固唾を飲んだ。
緊張で口の中が乾いてきた、近くに自販機なんかはありそうにもない。
どうにも落ち着かない感じでソワソワしていたその時。
何らか砂利（じゃり）を踏みつける音がした。何かがいる。
俺はこういう状況は大体危機的状況に遭遇する。
「ヤァ」
まさかの抄奈加だった。そういえばコイツも普通の人間じゃなかったな。
「よく来れましたね」
ここまで来るのに苦労した、と抄奈加は言う。
だが、本当にそうなのかは俺にとっては疑うところであった。
コイツが来たせいでまた何か面倒なことが起こりそうな予感だ。
一部を除いて。除かれた奴はコイツだったんだな。今ハッキリとわかった。
「さて、今日は何の話なの？」
「まぁ今回は路弘さんにとっては、かなり大きな話だと思います」
「ははーん、さては何か別に奴に襲われたりしたんじゃない？
路弘君が気に食わない！て奴が…」
どうしてコイツはわかるんだ。恐ろしい。
巧は、流石（さすが）ですね、と軽く流すだけである。コイツもコイツであれだな…。
まぁとりあえず、危機的状況では無いことに感謝。
「で、お前は何しに来たんだ？」
「その話に興味があるから付き合ったげるよ！」

勘弁してくれよな。
「嬉しい悲鳴だな」
抄奈加も鼻で笑った。
だが、この先起こる何らかの事件のためには、
コイツらの話を聞いておくことも重大な事だと思った。
「抄奈加はこの空間の事は知っているのか？」
「この空間というと？」
「まぁ、時間が止まって？こんな具合になっちゃってる空間の事さ」
「ああ、そりゃあもちろん。巧クンや私のような“人間”は皆知ってるよ」
人間――だと？お前らは本当に人間なのか？
よく考えればお前らの正体もロクに教えてもらってない気がする。
巧は、最初はタメ口だったが、
いつの間にか敬語になっていた。何が起こったのかここにも疑問。
抄奈加は…こいつは…全く情報がない。
ただ、神に詳しいというだけしか聞いていない。
「さて、あまり長くなってはお疲れになるでしょうから説明いたしましょう」
３０分間お前らの話を聞いているのと、６時限の授業は同じぐらい疲れるよ。
「今この空間は、私が指定範囲に時間圧縮をかけているためのものです。
　周りの時間は止まっていますが、それはこの空間だけであり、
　同じこの場所でもこの外空間では何ら変りない動きをしています。
　ですから、別に他人に迷惑をかけることもありません」
成程。これまたスゴイことをしてくれるものだ。
こんな人間がいたら、大きく世界に貢献できそうな気がしないでもないのだがな。
「なぜこんな空間を作ったんだ？」
あまり多くの人間にこの事実を知られたくないから、と巧は言う。

こんなことを事実として受け止める“普通の人間”がどこにいようか。
「でも、この空間は特殊な人間にとっては目立つ存在になったりはしないのか？」
「路弘さんもなかなかいい質問をするようになってきましたね。感無量です」
変なところで感無量られても困る。
「そこら辺のことは、空間をつくる人間によって違ってきます。詳細は言えませんが、空間創作が下手な人間であれば、特殊な人間によってすぐ察知されてしまいます。私が言うのも何ですが、私は空間創作はかなりの得意分野でしてね」
抄奈加に察知されてるじゃないか。大丈夫なんだろうか？
それとも抄奈加の察知能力が飛び抜けてすごいとか？
「さて、そろそろ本題に入りましょうか。昨日の出来事についてです」
もはや空間と昨日のこと、どちらが本題になっているかわからない。
そして巧はいつものとおり深呼吸をする。
巧はこの後、恐ろしい話を“また”することになるのである—。

11話　ちゃんと、言えよ！（後書き）

なんかパターン化してきた気がします。
路弘の身に、あるいはその周りで何かスゴイ出来事が起こり、
そこで巧（抄奈加も含め）が解説をする。路弘ビビル（ °Д °；）
そろそろパターン化から抜け出さないとマズイきがしてきた夢光でした。

１２話　歴史は繰り返す？（前書き）

何も言いません何も言えません何も（ｒｙ

12話　歴史は繰り返す？

「まず、あなたを倒そうとした理由ですが、
恐らくアイツは、あなたが神に選ばれたことに恐怖を抱いてたのでしょう。
あなたが神に選ばれた、となるとあなた次第で生命が…
そして、地球全体、世界をも死に追いやることも可能になるわけです。
アイツが変な攻撃をするのは…“普通の人間ではないから”と思ってください。
詳細は今あなたに説明しても何のことかサッパリわからないでしょう。
そして、あの時私は“家の中に逃げては危険”と言いましたね。
理由は単純、家ごと破壊される危険性があるからです。
そしてあなたにとって大きめな疑問でしょう。
かなりの距離があるにも関わらず、私の声がよく聞こえたでしょう。
それは「スプリッティング」と言うものです。
心に話しかける事が出来る技です。
これは、特殊な人間であるならば誰でも出来る技です。
そしてもう一つ疑問があったでしょう。あのドームです。
これは「クローズドドーム」と言って、特殊な人間しか入ることが出来ません。
このドームを発生させる際、敵が範囲内に居るときに使用可能です。
創作時間は人によって異なります。
これも自分で言うのも何ですが、私はかなり早い方です。
ま、とりあえずこんなところです。他に何かありますか？」

あることにはある。
なぜ心に話かけれるのか、なぜドームを作れるのか、なぜビームを出せるのか。
だが、そんな事きいても無駄だ。自滅しそうだ。
「で…結局俺はこの先どうしていればいいんだ？」
「なるようになります。その時次第なので、普通に過ごしてもらって結構です」
だがな…。そう言われてもな。
こんな話聞かされて、普通に過ごすことなんかできそうにない。
むしろ、今日から恐怖に怯えて暮らすことになりそうだぜ。
「ただ路弘クン、気をつけてね。
今日帰りにでも何か現れるかもしれない。
毎日危険があるって事なんだよ」
「へいへいわかってますよ…」
とりあえず、疲れたので適当に話を流して、帰宅することにした。

―自宅。
俺は帰って来るなり、風呂へ入った。

―風呂。
「ふっー…」
疲れた…とりあえず疲れた…。
風呂に入ることで少しは疲れは取れるかと思ったが、全くだ。
技名とかあるのかよ…ったく。
頬をつねっても痛いだけだ。夢ではないようだ。
思わず浴槽で寝てしまいそうになるのも度々。
「毎日が危険ねぇ…」
そういって俺は浴槽へ顔を沈めた。
「……プハァッーー！！」

…自分は何故こんな事に巻き込まれたのだろう。
いや、巻き込んだのは俺なのか？俺が神をも巻き込んだのか？
俺はどうしたらいいんだ？俺は何も出来ることがないのか？
この先、危機に巻き込まれながら俺は何も出来ずに生きていくのか？
どうしたら俺はこんな生活から抜け出すことが出来るんだ？
俺はどんな人生を…世界はどんな運命になるんだろうか…。

「風呂で変なこと考えちまったか。のぼせちまったよ」

12話　歴史は繰り返す？（後書き）

何（ry

１３話　絶望的危機（前書き）

絶望的危機です。。。

１３話　絶望的危機

―８月３０日月曜日。
夏も終わる。だが、猛暑は終わらない。
今日は真夏日、３２度。今年一番の暑さであった。

―学校。
校舎内も問題なく暑く、３２度を上回る可能性だってある。
それに、人が結構いるから、湿度も高くなりジメジメしてくる。
皆、ノートをうちわ代わりに、うちわ本体を持ってきてる奴もいた。
そんな学校も俺にとっては、巧と抄奈加の話を聴くためだけの場所になっていた。
もっとも、その２人以外と会話をしたこともほとんどないんだがな。
「おはようございます」
巧だ。巧はどうやら校内の中でもイケメントップ３に入るようで、教室に入る時でも女子がざわめいている。クソッー、リア充め。
「昨日はお疲れのようでしたが、体調はどうです？」
「お前らが来てから、俺の体調はおかしいままさ」
巧は苦笑いをして、俺の後ろの机に腰をかけた。
「おはよう！」
抄奈加だ。抄奈加も抄奈加で男子に騒がれている。クソッー。
俺がきても騒ぐことは愚か、俺が教室に入ったことすら気づいていない。
「昨日は何事もなかったみたいだね」
「まぁな」
そんな短い会話の後、抄奈加は友達に呼ばれてどこかへ行った。
抄奈加は俺や巧とは違い、友達が多い。この学校では珍しいことだ。
そんな呑気な事を考えていられるのも今のうちだとは、俺は知る由（よし）もなかった。

―2時限目。
相変わらず授業を聞かない奴ばかりである。
俺もそのなかの1人。昨日のことを考えていただけである。
早く2時限目が終わらないかと思って時計を確認。
残り40分、と思ったその時だった。
「せ、先生、腹の調子が思わしくないのでトイレへ行かせてもらいます」
そう言って巧は教室へ出た。
「わ、私も頭痛がするので…失礼します」
抄奈加も教室を出た。
特殊な人間でもこんなことがあるんだなと、俺は密かに思っていた。
それから、間もなくの事。
「路弘さん、急いで下駄箱の、玄関前へ来て下さい！早く！」
巧の心の声が聞こえた。
スプリッティングだったか。いやそんな事を考えている暇はない。
急ごう。
運良く教師が、あの2人が心配だと見に行こうとした。
「先生、あの2人は俺が見てきますよ」
おお、頼んだと教師が言った。助かったぜ。

―玄関前。
「巧、一体どうしたんだ？授業まで抜けだして…」
「そんな呑気なことを言っている場合ではありません！
少し静かにしてください。情報操作を行います」
情報操作って何だと訊こうとしたが、焦っているようなのでやめておいた。
巧の口から呪文のような言葉が溢(あふ)れ出る。
そして巧は小さな声で「情報操作の完了。実行」と言った。
その後、周りは静寂に包まれ昨日のような無音状態となった。何も

動かない。
ほんの１０秒後、校内放送で俺と巧と抄奈加の名前が出された。
その後の言葉に俺は驚かされた。
「以上３名は、体調不良のため早退となります。
最近は病原菌が温暖化の影響で数倍に増加したとの話です。気をつけましょう」
「巧、何を…！」
「答えている暇などありません！
とりあえず、私の体に触れてください！は、早く！」
何があったんだ？巧がこんなに焦るところなど見たことがない。
俺は慌てる巧につられて、焦って巧に触れた。
抄奈加も巧に触れていた。もう何をするべきかわかっているようだ。
そう思った瞬間であった。

俺は学校ではなく、よくわからない所にいた。
「巧、もしやここはクローズドドームか？」
「そうです」
巧は冷や汗ＭＡＸでそういった。
抄奈加もかなり焦っているようで、挙動不審に陥っている。
「ふー…」
巧は落ち着いたようだ。抄奈加も落ち着いたようだ。
俺には何のことかもわからないが、俺も落ち着くことができた。
そして現状を“また”解説することになるのである―。

１３話　絶望的危機（後書き）

絶望的危機です。。。

１４話　さらば友よ（前書き）

完結フラグ。今回は短めなんだアアアアェ゛イ。

１４話　さらば友よ

「おい、どうしたんだ？」
とてつもなく焦っている様子をみせている２人に俺はそう質問した。

これから俺を殺しに誰かがやってくる。
学校で暴れるわけにはいかないので、移動した。
しかし今回のは以前とは違って、かなり絶望的な状況である。
いくら巧達でも屈服せざるを得ない状態で、下手をしたら世界は壊滅する。

俺が巧から話を聞いていて、理解できた範囲である。
「俺はどうすればいいんだ？黙って犬死しろってか？」
巧は深呼吸を２度、３度とした。かなり真面目なようだ。
「あなたが死んでしまっては神が混乱に陥ります。
そうなってしまえば神は世界を壊しはじめ、やがて世界は無に…。
そうなるのだけは何とか防ぎたいのです。
そのため、貴方はとりあえずなにもしないでいてください。
どんな時でも冷静さを忘れないでいてください」
世界の壊滅…。
俺はそんな事、考えたこともなかった。
俺が原因で世界が壊滅するだと？冗談じゃない。
「俺に出来ることは何一つないのか？」
残念ながら無いという。世界を運命を握っている当の本人が何も出来ないとは情けない。
「！！」
「！！」
「な、何だ！？」
「来ました、路弘さん！」

そう言って巧はこちらを向いた。
「路弘さん、今まで本当にありがとうございました。
何かと路弘さんには危険な目に遭わせてしまって…本当に申し訳ございません。
貴方といた…ま、本当に短期間でしたが、楽しかったです。
これからも何かに巻き込まれることはあると思います。
ですが、貴方だけは何としても生き延びてください。世界のためにも…。
これで私達からここで言うことは何もありません。
―路弘さん、お元気で」
何を言ってるんだと言おうとした瞬間に、俺は意識が消えた。
そして意識が戻ったときには自分の家の前にいた。
俺は助かったのか？果たしてここは天国か地獄か？
「路弘さん…」
これは確かスプリッティ…いや話を聞こう。
「今あなたを私の能力によって家の前へ転送しました。
私と抄奈加さんは、この危機を防ぐために、命をかけて奴を止めています」
「命をかけてだと？ふざけるな！そんなんなら俺が死ぬ！」
俺が死んでは世界は壊滅するからダメだと言うんだろう。
案の定そう言ったが、その後巧はこう続けた。
「貴方には、世界の壊滅とは別の意味でも生き続けて欲しいんです。
普通の人間として、私達の良き“友達”として…」
「バカヤロー…ふざけるんじゃねぇっー！！」
「路弘さん、ありがと…ございま…」
「巧！巧ー！」
スプリッティングが切れた。
もう嫌な予感しかしない。思いたくない。巧が…巧達が……。
いくら何でもひどすぎる…なんでアホでバカでどうしようもない俺じゃなく、

何の罪もなく他人思いで優しい巧達が死ななければならないんだ。
出来ることならば俺が代わりに死んでやりたかった。
そしてクローズドドームが爆発した。
そこには何もなく、皮肉にもきれいな夜空が輝いていた―。

１４話　さらば友よ（後書き）

Ω＼ζ。）チーン

15話　そしてまた・・・（前書き）

イ゛ェアアアア

15話　そしてまた・・・

―8月31日火曜日。8月も最終日である。
もうすぐ秋だ。

―学校。
俺は巧達が死んで、どうにも病んでしまってるようだった。
寝起き当初は、学校に行かないでいようと思ったが、それも襲われそうだと思い。
周りで巧と抄奈加が休んでいるのが話題になっている。
俺の方をみて、「よくアイツ1日で治ったな」と言っている奴もいる。
そりゃ体調不良なんてーのは全くの嘘だからな。
まぁ精神的におかしくなりそうだったのは事実だった。巧の死後。
巧が転校してきて1週間、抄奈加が転校してきて5日。
特に長い付き合いではなく、むしろかなり短い。
なのに、こいつらには俺はかなり好感を抱いていた。何故だろう。
特に面白い話をしたわけでもない。
ただ、地球が世界がどうだのくだらない話をしていただけだった。
自分でもわからない好感を抱いていた。他の人とは何かが違う好感を。
クローズドドームが壊れた光景を見たときは正直、生きる気力さえ失せかかっていた。
というより、俺だけが生きていていいのかという罪悪感の方があった。
そして、もう後ろ2つの机から妙な気配を感じることもなくなった。
その気配を、今となって気づいたが俺は心地よく感じていたんだろうか。
周りは体調不良だと信じこんで、なんら変わりない雰囲気だ。

事実を知っていたらこいつらはどうなるんだろうか。

―1時限目。
寝起きと言うこともあるか、授業にはほとんど集中できていない。
いつも集中できていないのは確かであるが、今日は別だ。
周りのことがまるで耳に入ってこない。自分だけの世界に入り込んだようで。
もう自分でも何を考えているのか、いや考えていないのか。
完全に混乱している。

―4時限目。
そんな事を考えながらとうとう4時限目終了10分前。
俺にもっと力があったら、こんなことにはならなかったんだろうな。
俺が生まれていなかったら、変な神にでくわすことはなかったんだ。
あの2人に迷惑をかけることも、死ぬこともなかった。
世界が壊滅の危機に直面したりもしなかったはずだ。
やはり全て自分が悪かったんだ。もうどうしたらいいのかわからない。

―昼食。
4時限目が終わっても、俺は立ち直ることがなかった。
立ち直れるわけがない。いつになっても立ち直れそうにない。
そんな時、何と言うタイミングであろうか俺の名が校内放送で呼ばれた。
職員室まで来るように、とのことだった。
だが要件は、ただあの2人がどうだったと言うことだ。
体調不良と言う事で、あの2人と仲が良かった俺に様子を聞きたかったようだ。
仲が良い、その分体を突き抜ける悲しみは10倍にも100倍にもなる。

自分はこみあげてくる涙を押さえて、2人は大丈夫と言った。
まさか。まさかであった。
巧からのスプリッティングが聞こえる。これは夢か？
「路弘さん。ご無事のようでなによりです。
貴方が落ち込んでいるのではないかと思い、話かけさせてもらいました。
今回は別で、あなたの返事は聞こえません。
それにあまり長時間は話していられないようです。
私達が死んだのは、貴方のせいではありません。
むしろ貴方に迷惑をかけたがためにこのような事になったのです。
ですので、あまり自分を責めないでください。
それで落ち込まれたら、こちらとしても困ります。
短いですが、時間のようです…またいつか…会う日…まで…」
「巧！」
切れてしまった。
俺が落ち込んでいることを見透かしたかのような話だった。
それに、こんなことを言われてはさらに落ち込みたい。
だがこれ以上落ち込む事は巧達にも迷惑をかけることになる。
そう思って俺は立ち直ることを決めた。現時点で立ち直れそうだ。
ただ、出来ることなら巧達にはもう一度戻ってきて欲しかった。
たとえ俺がこの先どんな危険にさらわれようと。
それが今の俺を立ち直らせるための一番の薬だろう。

俺は話が終わった後、何故か屋上へと向かっていた。
無意識のうちに足が屋上を目がけて動いていたようだ。
巧達がいると思っていたんだろうか。
いるはずはない、だがいて欲しいとバカな事を考えていた。
屋上の扉をあける。
―誰もいなかった。当然だ。

少なくとも巧達はどこにもいなかった。
いないとわかっていても、あいつらがここにいないと寂しい。
もうあいつらは居なくなってしまったんだなと俺は改めて実感した。
屋上の辺りを見回して少しシンミリ。
そして足を浮かせ、戻ろうとした時であった。
後ろから聞き慣れた声で俺の名前を呼んだ。
俺は振り返った。

―そこに立っていたのは巧達であった。

１５話　そしてまた・・・（後書き）

全１５話、完結しました。
今までご愛読していただいてた皆様、ありがとうございました。
暇あらば、次作も手をつけようかと思っております。
その時は、何卒よろしくお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6792q/

なんだこの適当な小説

2011年10月8日18時13分発行